

# 小春の狐

泉鏡花

青空文庫



朝——この湖の名ぶつと聞く、蜷しじみの汁で。……爛かんをさせるのも面倒だから、バスケットの中へ持参のウイスキーを一口。蜷汁にウイスキーでは、ちと取合せが妙だが、それも旅らしい。……  
 いい天気で、暖かかったけれども、北ほっこく国の事だから、厚あい外が套いとうにくるまって、そして温泉宿を出た。

戸外の広場の一ひとくるわ廓、総湯の前には、火の見の階はしご子が、高く初冬の空を抽ぬいて、そこに、うら枯れつつも、大樹の柳の、しつとりと静しずかに枝垂しだれたのは、「火事なんかありません。」と言いそ

うである。

横路地から、すぐに見渡さるる、みぎわあし汀の蘆の中に舳みよしが見え、とも艫が隠れて、葉越葉末に、船頭の形が穂を戦そよがして、その船の胴に動いている。が、あの鉄鎚てつづいの音を聞け。しるしばんてん印半纏の威勢のいいでなく、田船を漕こぐお百姓らしい、もつさりとした布子ぬのこのなりだけれども、船大工かも知れない、カーンカーンと打つ鎚つちが、一面の湖の北の天そらなる、雪の山の頂に響いて、その間々に、

「これは三保の松原に、はくりよう伯良と申す漁夫にて候。万里の好山に雲忽たちまちに起り、一楼の明月に雨始めて晴れたり……」

と謡うのが、遠いが手に取るように聞えた。——船大工が謡を唄う——ちよつと余所よそにはない気色けしきだ。……あまつさえ、地震の

都から、とぼんとして落ちて来たものの目には、まるで別なる乾坤んちである。

脊の伸びたのが枯交かれまじり、疎まぼらになつて、蘆が続く……傍かたわらの木納屋や、苦屋とまやの袖には、しおらしく嫁菜の花が咲残る。……あの戸口には、羽衣を奪われた素裸の天女が、手鍋てなべを提げて、その男のために苦勞しそうにさえ思われた。

「これなる松にうつくしき衣掛ころかれり、寄りて見れば色香妙たえにして……」

と謡っている。木納屋わきの傍は菜畑で、真中まんなかに朱を輝かした柿の樹がのどかに立つ。枝に渡して、ほした大根のかけ紐ひもに青貝ほどの小朝顔すがが縋すがつて咲いて、つるの下に朝霜の焚火たきびの残つたよう

な鶏頭かすかが幽かすかに燃えている。その陽だまりは、山靈やまらぎに心あつて、一封のたよりもみじの音信を投げた、玉章たまずさのように見えた。

里はもみじにまだ早い。

露地が、遠目鏡とおめがねを覗のぞく状さまに扇形おうぎなりに展ひらけて視ながめられる。湖と、船大工と、幻の天女と、描ける玉章を搔かきみだ乱すようで、近く歩あゆみを入るるには惜おしいほどだったから……

私は――

(これは城崎関弥きんぎせきやと言う、筆者の友だちが話したのである。)

――道をかえて、たとえば、宿の座敷から湖の向うにほんのりと、薄い霧に包まれた、白砂の小松山の方に向つたのである。

小店の障子に貼紙はりがみして、

(今日より昆布こぶまきあり候。)

……のんびりとしたものだ。口上が嬉しかったが、これから漫そぞろあるき

歩あ というのに、こぶ巻は困る。張出しの駄菓子に並んで、箆ざるに柿が並べてある。これなら袂たもとにも入ろう。「あり候」に挨拶あいさつの心得で、

「おかみさん、この柿は……」

天井裏の蕃とうがらし椒まっかは真赤だが、薄暗い納戸から、いぼ尻まきの顔を出して、

「その柿かね。へい、食べられましない。」

「はあ？」

「まだ渋が抜けねえだでね。」

「はあ、ではいつ頃食べられます。」

きくやつ奴も、聞く奴だが、

「早うて、……来月の今頃だあねえ。」

「成程。」

まやまがつたく山家はのん気だ。つい目と鼻のさきには、化粧けししょうれんが煉瓦

で、露バルコニー台と言うのが建っている。別館、あるいは新築と称し

て、湯宿一軒に西洋づくりの一部は、なくてはならないようにしている盛場でありながら。

「お邪魔をしました。」

「よう、おいで。」

また、おかしな事がある。……くどいと不可いけない。道具だてはし



ないが、硝子戸がらすどを引きめぐらした、いかげんハイカラな雑貨店が、細道にかかる取と着つきの角にあつた。私は靴だ。宿の貸下駄で出て来たが、あお桐の二本歯で緒が弛ゆるんで、がたくり、がたくりと歩ある行きにくい。此店ここで草履を見着けたから入つたが、小児こどものうち覚えた、こんな店で売っている竹の皮、藁わらの草履などは一足もない。極く雑なのでも裏つきで、鼻緒が流行のいちまつと洒落しやれている。いやどうも……柿の渋は一月半おくれても、草履は駄かけあ足しで時流に追着く。

「これを貰もらいますよ。」

店には、ちようど適齡前の次男坊といった若いのが、もこもこの羽織を着て、のっそりと立っていた。

「貰つて穿はきますよ。」

と断つて……早速ながら穿替えた、——誰も、背負しよつて行く奴もないものだが、手一つ出すでもなし、口を利くでもなし、ただにやにやと笑つて見ているから、勢い念を入れなければならなかつたので。……

「お幾いくら干。」

「分りませんなあ。」

「誰かに聞いてくれませんか。」

若いのは、依然としてにやにやで、

「誰も今居おらんのですね……」

「じゃあ帰途かえりに上げましょう。じきそこの宿に泊つたものです。」

「へい、大きに——」

まったくどうものんびりとしたものだ。私は何かの道中記の挿絵に、土手の薄すすきに野茨のぼらの実がこぼれた中に、折敷おしきに栗を塩尻に積んで三つばかり。細竹に筒をさして、四しもんと、四つ、銭の形を描き入れて、傍そばに草鞋わらじまで並べた、山路の景色を思出した。

二

「この藪きは何と言います。」

山沿やまぞい

の根笹こながれに小流こながれが走る。

一方は、日ひ当あたりの背戸せうこを横手に

取つて、次第疎まばらに藁屋わらやがある、中に半農——この瀉かたすなどに漁たつきって活計

取つて、次第疎まばらに藁屋わらやがある、中に半農——この瀉かたすなどに漁たつきって活計

とするものは、三百人を越すと聞くから、あるいは半漁師——少しばかり商いもする——藁屋草履は、ふかし芋とこの店に並べてあつた——村はずれの軒を道へ出て、そそけ髪で、紺の筒袖を上うわつぱりわつぱり被かにした古女房が立つて、小さな箆へらに、真黄色まつきいろな蓆むしろを装もつたのを、こう覗のぞいている。と箆へらを手にして、服装なりは見すばらしく、顔かほも窈やつれ、髪かみは銀杏いちょうがえし返かへが乱みだれているが、毛けの艶つやは濡ぬれたような、姿すがたのやさしい、色の白はい二十はたちあまりの女をんながたたずず。

蓆むしろは軸ねじりを上うにして、うつむけに、ちよぼちよぼと並べてあつた。

実は——前年一度この温泉おんせんに宿とどつた時とき、やつぱり朝あのうち、：  
 …その時は町まちの方かたを歩ある行いいて、通りどおりの煮染屋にしめやの戸口かどぐちに、手て拭ぬぐいいを

頸くびに菅笠すげがさを被かぶつた……このあたり浜から出る女の魚売てんびが、秤んを下おろした処ところに行ゆきかかつて、鮮あたらしい雑魚ざつぎに添そえて、つまといつた形で、おなじこの蕈たけのこを箆へらに装まつたのを見た事があつたのである。

銀杏ぎんぎょの葉はばかりの鰈かれいが、黒い尾おしりでぴちぴちと跳はねる。車くるま蝦えびの小蝦こえびは、飴色あめいろに重かさなつて萌葱もえぎの脚あしをぴんと跳はねる。魴ほうぼうの鰭ひれは虹にじを刻きみ、飯鮓いいたこの紫むらさきは五つばかり、断ちぎれた雲うみのようようにふらふらする……こち、めばる、青、鼠ねずみ、樺色かばいろのその小魚こうおの色いろに照映てりはえて、黄きなる蕈たけのこは美うつくしかつた。

山国やまくにに育そだつたから、学問がくもんの上うへの知識ちしきはないが……蕈たけのこの名なの十とおやら十五ごじゅうは知しっている。が、それはまだ見た事ことがなかつた。……そ

れに、私は妙に蕈が好きである。……覗込んで何と言いますかと聞くと「霜こしや。」と言った。「ははあ、霜こし。」——十一月初旬で——松<sup>まつたけ</sup>蕈はもとより、しめじの類にも時節はちと寒過ぎる。……そこへ出盛る蕈らしいから、霜を越すという意味か、それともこの蕈が生えると霜が降る……霜を起すと言うのかと、その時、考<sup>ひま</sup>うる隙もあらせず、「旦那<sup>だんな</sup>さんどうですね。」とその魚売が箆をひよいと突きつけると、煮染屋の女房が、ずんぐり横肥りに肥った癖に、口の軽い<sup>ひょうきん</sup> 剽<sup>さかな</sup> 軽<sup>さかな</sup>もので、「買<sup>しし</sup>うてやらさい。旦那さん、酒の肴<sup>さかな</sup>に……はははは、そりやおいしい、猪<sup>しし</sup>の味や。」と大口を開けて笑った。——紳士淑女の方々に高い声では申<sup>もうしか</sup>兼<sup>か</sup>ねるが、猪はこのあたりの方言で、……お

察しに任せたい。

唄で覚えた。

薬師山から湯宿を見れば、ししが髪結ゆて身をやつす。

いや……と言ったばかりで、外ほかに見当は付かない。……私はそ

の時は前夜着いた電車の停車場の方へ遁にげ足あしに急いだつけが――

笑うものは笑え。――そよぐ風よりも、湖の蒼あおい水が、蘆あしの葉はご

しにすらすらと渡つて、おろした荷にの、その小魚こぎにも、蕈きのこにも颯さつ

とかかる、霜しもこしの黄茸きたけの風情ふうせいが忘れられない。皆みなとは言わぬが、

再びこの温泉おんせんに遊あそんだのも、半はんばこの蕈きのこに興おこじたのであつた。

――ほぼ心得た名なだけれど、したしいものに近ちかづくとして、あら

ためて、いま聞いたのである。

「この蕈は何と言います。」

何が何でも、一方は人の内室である、他は淑女たるに間違いない。——その真中<sup>まんなか</sup>へ顔を入れたのは、考えると無作法千万で、都会だと、これ交番で叱られる。

「霜こしやがね。」と買手の古女房が言った。

「綺麗<sup>きれい</sup>だね。」

と思わず言った。近<sup>ちか</sup>優<sup>まさ</sup>りする若い女の容<sup>きり</sup>色<sup>よう</sup>に打たれて、私は知らず目を外<sup>そら</sup>した。

「こちらは、」

と、片隅に三つばかり。この方は笠を上にした茶褐色で、霜こ



しの黄なるに對して、女郎花おみなえしの根にこぼれた、茨いばらの枯葉くわのよう  
 なのを、——ここに二人たつた渠等かれら女たちに、フト思くらい較べなが  
 ら指すと、

「かっぱ。」

と語音の調子もある……口から吹飛ばすように、ぶつきらぼう  
 に古女房が答えた。

「ああ、かっぱ。」

「ほほほ。」

かっぱとかっぱがはちあわ顛合せをしたから、若い女は、うすよごれ  
 たが姉あねさんかぶり、茶摘、桑摘む絵の風情の、手拭えみの口に笑をこ  
 ぼして、

「あの、川に居おります可こ恐おいのではありませんの、雨の降る時に  
な、これから着ますな、あの色に似ておりますから。」

「そんで幾いく干くらやな。」

古女房は委細構わず、笊の縁に指を掛けた。

「そうですね、これでな、十銭下さいまし。」

「どえらい事や。」

と、しよぼしよぼした目を睜みつた。睨にらむように顔を視ながめながら、  
「高いがな高いがな——三銭や、えつと気張きつて。……三銭が相  
当や。」

「まあ、」

「三銭にさっせえよ。——お前めえもな、青草ものの商売や。お客か

ら祝儀とか貰うようには行かんぞな。」

「でも、」

と葦きのことが映す影はないのに、女の臉まぶたはほんのりする。

安値やすいものだ。……私は、その言い値に買おうと思つて、声を掛かけようとしたが、隙すきがない。女が手を離すのと、箆ひつたくを引手繰るのと一所で、古女房はすたすたと土間へ入つて行く。

私は腕組をしてそこを離れた。

以前、私たちが、草鞋わらじに手鎌、腰兵糧こしびようろうというものものしい

結束で、朝くらいうちから出掛けて、山々谷々を狩つても、見た数ほどの葦を狩り得たためし験は余りない。

たった三銭——気の毒らしい。

「御免なして。」

と背後うしろから、蹠あしおと音を立てずしずか静に来て、早や一方は窪地の蘆の、  
片路かたみちの山の根を摺すれちが違がい、慎しんましやかに前へ通る、すり切き草履れ  
に踵かかとの霜。

「ああ、姉さん。」

私はうっかりと声を掛けた。

三

「——旦那さん、その虫は構うた事には叶かないませんわ。——  
煩うるそう  
てな……」

もの言もやや打解けて、おくれ毛を撫でながら、

「ほつといてお通りなさいますと、ひとりでに離れます。」

「随分居るね、……これは何と言う虫なんだね。」

「東京には居りませんの。」

「いや、雨上りの日当りには、鉢前などに出はするがね。こんな  
に居やしないようだ。よくも気をつけはしないけれど、……（し  
ようじよう）よりもつと小さくつて煙のようだね。……またここ  
にも一団ひとかたまりになっている。何と言う虫だろう。」

「太郎虫と言いますか、米搗虫こめつきむしと言うんですか、どつちかでござ  
いますしよう。小さな児こが、この虫を見ますとな、旦那さん……」

と、言が途絶ことばえた。

「小さな児が、この虫を見ると?……」

「あの……」

「どうするんです。」

「唄をうとうて囃はやしますの。」

「何と言って……その唄は?」

「極きまりが悪うございますわ。……（太郎は米搗き、次郎は夕な、夕な。）……薄暮うすくれあい合には、よけい沢山たん飛びますの。」

……思出した。故郷の町は寂しく、時雨の晴間に、私たちもやっぱり唄った。

「仲よくしましょう、さからわないで。」

私はちよつかいを出すように、面おもてを払い、耳を払い、頭を払い、

袖を払った。茶番の最明寺さいみやうじどののような形を、更あらためて静しずかに歩行あるいた。——真一文字の日あたりで、暖かさ過ぎるので、脱がいだ外が套いとうは、その女が持つてくれた。——歩行あるきながら、

「……私は虫と同じ名だから。」

しかし、これは、虫にくらべて謙遜した意味ではない。実は太郎を、浦島の子なぞらに擬ひそかえて、潜ひそかに思い上った沙汰さたなのであつた。

湖はるかを遙ひとくるわに、一廊、彩色した竜の鱗うろこのごとき、湯宿々々の、壁、柱、葺いらかを中に隔てつて、いまは鉄鎚てつちの音、謡の声も聞えないが、出崎の洲すの端はたに、ぽつつりと、烏帽子えぼしの転まがった形になつて、あの船も、船大工も見える。木納屋の苫屋とまやは、さながらその素袍すおう

の袖である。

——今しがた、この女が、細道をすれ違つた時、葦きのこに敷いた葉をざる残した筈を片手に、行く姿に、ふとその手鍋てなべ提げた下界の天女おもかけの倂おもかけを認めたのである。そぞろに声掛けて、「あの、葦きのこを、……三銭に売つたのか。」とはじめ聞いた。えんぶだごんの価値あたでも説く事か、天女に対して、三銭也を口にする。……さもしいようだが、対手あいてが私だから仕方がない。「ええ、」と言うのに押被おつかぶせて、「馬鹿々々しく安いではないか。」と義憤を起すと、せめて言いねの半分には買ってもらいたかつたのだけれど、「旦那さんが見てであつたしな。……」と何か、私に対して、値の押問答きまりをするのが極きまりが悪くもあつたらしい口振くちぶりで。……「失礼だが、



世帯の足たしになりますか。」ときくと、そのつもりではあつたけれど、まるで足りない。煩わづらつていなさる母さんの本復を祈いのつて願掛ねがひけする、「お稲荷いなりさま様のお賽錢さいせんに。」と、少しあれだが、しなやかな白い指を、縞目しまめの崩れた昼夜帯へ挟んだのに、さみしい財布がうこん色に、撥ばちぶくろ袋とも見えはさまず挟はさまつて、腰帯ばかりが紅べにであつた。「姉さんの言い値いぢほどは、お手間を上げます。あの松原は松露があると、宿で聞いて、……客はたて込む、女中は忙しい、……一人で出て来たが覚おぼつか束つかない。ついでに、いまの（霜しもこし）のありそうな処へ案内して、一つでも二つでも取とらして下さい、……私は茸狩たけがりが大好き。——」と言いつて、言ううちに我われながら思入おもひつて、感激きんきした。

はかない恋の思出がある。

もう疾とくに、余所よその歴れつきとした奥方だが、その私より年上の娘さんの頃、秋の山遊びをかねた茸狩に連立った。男、女たちも大勢だった。茸狩に綺羅きらは要らないが、山深く分入るのではない。重箱を持参で莫ご蔭ごに毛氈もうせんを敷くのだから、いずれも身ぎれいに装った。中に、襟えり垢あかのついた見すばらしい、母のない児この手を、娘さん——そのひとは、厭いとわしげもなく、親ひしく曳ひいて坂を上ったのである。衣きぬの香に包まれて、藤紫の雲うちの裡うちに、何も見えぬ。冷いが、時めくばかり、優しさが頬に触れる袖の上に、月影のような青地の帯の輝くのを見つつ、心も空に山路たどを辿たどった。やがて

皆、谷々、峰々に散つて蕈きのこを求めた。かよわいその人の、一人、毛氈に端坐して、城の見ゆる町を遙はるかに、開いた丘に、少しのぼせて、羽織を脱いで、蒔まきえ絵の重に片袖を掛けて、ほっと憩やすらつたのを見て、少年は谷に下りた。が、何を秘かくそう。その人のいま居る背後うしろに、一本ひとつもとの松は、我がなき母の塚であつた。

向つた丘に、もみじの中に、昼の月、虚空に澄んで、月がつてん天の御堂みどうがあつた。——幼い私は、人界きのこの茸を忘れて、草がくれに、偏ひとえに世にも美しい人の姿を仰いでいた。

弁当あつまに集つた。吸筒すいづつの酒も開かれた。「関ちゃん——関ちゃん——」私の名を、——誰も呼ぶものがないのに、その人が優しく呼んだ。刺すよと知りつつも、引ひッつかんで声を堪こらえた、茨いばらの枝

に胸のうずくばかりなのをなお忍んだ——これをほかにしては、もうきこえまい……母の呼ぶと思う、なつかしい声を、いま一度、もう一度、くりかえして聞きたかったからであつた。「打棄つておけ、もう、食いに出て来る。」私は傍そばの男たちの、しか言うのさえ聞える近まにかくれたのである。草を噛かんだ。草には露、目には涙、縋すがる土にもしとしとと、もみじを映す糸のような紅くれないの清水が流れた。「関ちゃん——関ちゃんや——」澄み透とおつた空もやや翳かげる。……もの案じに声も曇るよ、と思うと、その人は、たけだちよく、高尚に、すらりと立った。——この時、日月を外じつげつにして、その丘に、気高く立つたのは、その人ただ一人であつた。草に縋すがつて泣いた虫が、いまは堪たまらず蟋蟀こおろぎのようこおろぎに飛出すと、

するすると絹の音、颯と留南奇の香で、もの静なる人なれば、せき心にも乱れずに、衝と白足袋で氈を這つて肩を抱いて、「まあ、可かつた、怪我をなさりはしないかと姉さんは心配しました。」少年はあつい涙を知つた。

やがて、世の状とて、絶えてその人の倂を見る事の出来ずなつてから、心も魂もただ憧憬に、家さえ、町さえ、霧の中を、夢のように徜徉つた。——故郷の大通りの辻に、老舗の書店の軒に、土地の新聞を、日ごとに額面に挿んで掲げた。表三の面上段に、絵入りの続きもののあるのを、ぼんやりとゝんで見ると、さきの運びは分らないが、ちようと思合つた若い男女が、山に茸狩りをする場面である。私は一目見て顔がほてり、胸が躍つた。

——題も忘れた、いまは朧おぼろげ気であるから何も言うまい。……その恋人同士の、人目のあるため、左右の谷へ、わかれわかれに狩入ったのが、ものに隔てられ、巖いわに遮られ、樹に包まれ、兇漢くせものに襲われ、獣に脅かされ、魔に誘われなどして、日は暗し、……次第に路を隔てつつ、かくて両方でいのちの限り名を呼び合うのである。一句、一句、会話に、声に——がある……がある……！

が重る。——私は夜も寝られないまで、翌日の日を待ちあぐみ、日ごとにその新聞の前に立って読み耽ふけった。が、三日、五日、六日、七日になっても、まだその二人は谷と谷を隔てている。……も、——も、も、邪魔なように焦じれりたい。が、しかしその一つ一つが、峨々ががたる巖いわ、森しんとした樹立こたちに見えた。くとう、ささえ深く刻ん

だ谷に見えた。……赤新聞と言うのは唯<sup>ただいま</sup>今でもどこかにある：  
：土地の、その新聞は紙が青かった。それが澄渡った秋深き空の  
ようで、文字は一<sup>ひと</sup>つもみじであつた。作中の娘は、わが恋人で、  
そして、とぼんと立つて読むものは小さな茸<sup>きのこ</sup>のように思われた。  
——石になつた恋がある。少年は茸になつた。「関弥。」ああ、  
勿体ない。……余りの様子を、案じ案じ捜しに出た父に、どんと  
背中を敲<sup>たた</sup>かれて、ハツと思つた私は、新聞の中から、天狗<sup>てんぐ</sup>の翼<sup>はね</sup>を  
こぼれたようにぼかんと落ちて、世に返つて、往來<sup>ゆきき</sup>の人を見、車  
を見、且つ屋根越に遠く我が家の町を見た。——  
なつかしき茸狩よ。

二十年あまり、かくてその後、茸狩らしい真似をさえする機会

がなかつたのであつた。

「……おともしますわ。でも、大勢で取りますから、茸きのこがあればいいんですけど……」

湯の町の女は、先に立つて導いた。……

湖のなぐれに道を廻めぐると、松山へ続くなわて暇なわてらしいのは、ほかほか

と土が白い。草のもみじを、嫁菜のおくれ咲が彩つて、枯かれ蘆あしに

陽が透通る。……その中を、飛交うのは、琅ろうかん玕かんのようないなご蟲むしであ

つた。

一つ、別に、この暇なわてを挟んで、大なる濁なが湧わいたように、刈田

を沈かめ、鳩つぶりを浮かせたのは一昨日よの夜よの暴風雨なごりの余残なごりと聞いた。

蘆の穂ほに、橋がかかると渡つたのは、横に流るる川筋を、一つら



に 渺々びようびようと 汐しおが満ちたのである。水は光る。

橋たもとの袂にも、蘆の上にも、随所に、米つき虫は陽炎かげろうのごとくに舞って、むらむらむらと下へ巻き下くだっては、トンと上って、むらむらとまた舞いさがる。

一筋の道は、湖の只ただなか中を霞の渡るように思われた。

汽車に乗って、がたがた来て、一泊いくら幾干の浦島に取って見よ、この姫君さえ僭越せんえつである。

「ほんとうに太郎と言います、太郎ですよ。——姉さんの名は？」

……

「……………」

「姉さんの名は？……………」

女は幾度も口籠りながら、手拭てぬぐいの端を俯目ふしめに加えて、

「浪路なみじ。……」

と言った。

——と言うのである。……読者諸君、女の名は浪路だそうです。

#### 四

あれに、翁おきなが一人見える。

白砂の小山の畦道あぜみちに、菜畑の菜よりも暖かそうな、おのが影

法師を、われと慰むように、太い杖つえに片手づきしては、腰を休め

休め近づいたのを、見ると、大黒頭巾だいこくずきんに似た、饅頭形まんじゅうがたの黄

なる帽子を頂き、袖なしの羽織を、ほかりと着込んで、腰に毛けぎん巾着ちやくを覗のぞかせた……片手に網のついた畚びくを下げ、じんじん端ばしよ折りの古足袋に、藁草履わらぞうりを穿はいている。

「少々、ものを伺います。」

ゆるい、はけ水のこながれ小流の、一段ちよろちよろと落口を差覗いて、その翁の、また一息憩やすろうた杖に寄つて、私は言つた。

翁は、頭ずなりに黄帽子を仰向け、髯ひげのない円顔の、鼻の皺しわ深く、  
 すぐにむぐむぐと、日向ひなたに白い唇を動かして、

「このの、私わしがいま来た、この縦筋を真直まっすぐに、ずいずいと行か  
 つしやると、松原について畑を横に曲る処があるでの。……それを  
 をどこまでも行かせると、沼があつての。その、すぼんだ処に、

土橋が一つ架かつてゐるわい。——それそれ、この見当じや。」

と、引立てるように、片手で杖を上げて、釣竿つりざおを撓ためるがごとく松の梢こずえをさした。

「じやがの。」

と頭かぶりを緩く横に掉ふつて、

「それをば渡つてはなりませぬぞ。(と強く言つて) ……渡らず

と、橋の詰つめをの、ちと後あとへ戻るようなれど、左へ取つて、小高い処あがを上あがらつしやれ。そこが尋ねる実盛塚さねもりづかじやわいやい。」

と杖を直す。

安宅あたくの関の古蹟とともに、実盛塚は名所と聞く。……が、私は

今それをたずねるのではなかつた。道すがら、既に路傍みちばたの松山

を二ふた処とこばかり探したが、浪路がいじらしいほど気を揉もむばかりで、茸も松露も、似た形さえなかつたので、獲ものを人に問うもおかしいが、且かつは所在なきに、連つれをさし置いて、いきなり声を掛けたのであつたが。

「いいえ、実盛塚へは——行こうかどうかと思つてゐるので、……実はおたずね申しましたのは。」

「ほん、ほん、それでは、これじやろうの。」

と片手の畚を動かすと、ひたひたと音がして、ひらりと腹を翻かえした魚うおの金こん色じきの鱗うろこが光つた。

「見事な鯉こいですね。」

「いやいや、これは鮎ふなじゃわい。さて鮎ふなじゃがの……姉あねさんと連

立たつせえた、こなたの様子で見ればや。」

と鼻の下を伸のぼして、にやりとした。

思わず、その言ことばに連れて振返ると、つれの浪路は、尾花で姿を隠すように、私の外套で顔を横に蔽おほいながら、髪をうつむけになつていた。湖の小波さざなみが誘うように、雪なす足の指の、ぶるぶると震えるのが見えて、肩も袖も、その尾花なびに靡く。……手につまさぐるのは、真紅いばらの茨の実で、その連つらなる紅玉ルビイが、手首さんごに珊瑚さんごの珠じ数ゆずに見えた。

「ほん、ほん。こなたは、これ。（や、爺じじい……その鮒ほをば俺おれに譲れ。）と、姉ねえさんと二人して、瀉はに放ほういて、放生会しょうじょうえをさつしやりたそうな人相にんそうじゃがいの、ほん、ほん。おはは。」

と笑いながら、ちよろちよろ滝に、畚をぼちやんとつけると、

背を黒く鮒が躍つて、水音とともに鱗ひれが鳴つた。

「憂慮きづかいをさつしやるな。割さいて爺じいの口に啖くらおうではない。――

これは稲荷殿いなりでんへお供物に献けんずるじゃ。お目に掛かけましての上は、水に放すわいやい。」

と寄せた杖が肩を抽ぬいて、背を円ながれく流を覗のぞいた。

「この魚うおは強いぞ。……心配をさつしやるな。」

「お爺さん、失礼ですが、水と山と違ちがいました。」

私も笑つた。

「茸だの、松露だのをちつとばかり取り取とりたいのですが、霜しもこしな  
んぞは、どの辺にあるでしょう。御存ごぞんじはありませんか。」

「ほん、ほん。」

と黄饅頭を、點頭のままに動かして、

「茸——松露——それなら探さねば爺にかて分らぬがいやい。おはは、姉さんは土地の人じゃ。若いぱっちりとした目は、爺などより明かじや。よう探してもらわっしゃい。」

「これはお隙ひまづいえ、失礼しました。」

「いや、何の嵩かさ高たかな……」

「御免。」

「静しずにござれい。——よう遊べ。」

「どうかしたか、——姉さん、どうした。」

「ああ、可こ恐わい。……勿体ないようで、ありがたいようで、ああ、



可恐こおうございましたわ。」

「……………」

「いまのは、山のお稲荷様か、湯の竜神様でおいでなさいましよう。風のない、うららかな、こんな時にはな、よくこの辺をおあ  
るきなさいますそうですから。」

いま畚くわを引上げた、水の音はまだ響くのに、翁おきなは、太郎虫、米  
搗虫うしむしの靄もやのあなたに、影かげになって、のびあがると、日南ひなたの背せなも、  
もう見えぬ。

「しかし、様子は、霜しもこしの黄茸きだけが化けて出たようだったぜ。」  
「あれ、もつたいない。……旦那さん、あなた……」

## 五

「わ、何じやい、これは。」

「霜こし、黄い茸たけ。……あはは、こんなばばきのこを、何の事じやい。」

「何が松露や。ほれ、こりや、破ると、中が真黒まっくろけで、うじやうじやと蛆うじのような筋のある（狐の辜丸がりま）じやがいの。」

「旦那、眉毛つばに唾つばなとつけっしやれい。」

「えろう、女狐つまに魅つままれたなあ。」

「これ、この合羽かっぱ占地茸しめじはな、野郎の鼻毛が伸びたのじやぞいな。」

戻道。橋で、ぐるりと私たちを取巻いたのは、あまのじやくを  
 誑なまつたか、「じゃあま。」と言ひ、「おんじや。」と称となえ、「阿あ  
 婆ばあ。」と呼ぶるる、浜方くつきよう屈くつきよう竟あばずれかかあの阿婆摺あばずれかかあ媽あ々。町を一なめにす  
 る魚売の阿おつかあてあい媽あさあきない徒あで。朝商売の歸りがけ、荷も天秤棒も、腰  
 とともに大おおまた跨あに振つて来た三人づれが、蘆の横川にかかつたそ  
 の橋で、私の提さげたさ筈たかに集つて、口々に喚わめいては嘸はした。そのある  
 ものは霜こしを指でつついた。あるものは松露をへし破わつて、チ  
 エツと言つて水に棄てた。

「ほれ、ほんとうの霜こしを見さっしやい。これじやがいの。」  
 と尻とともに天秤棒を引ひ傾かたげて、私の目の前に揺り出した。

成程違う。

「松露とは、ちよつと、こんなものじゃ。」

と上荷の箆を、一人が敲たたいて、

「ぼんとして、ぷんと、それ、香こうしかろ。」

成程違う。

「私が方には、ほりたての芋が残った。旦那が見たら蝟たこじやろね。」

「背中を一つ、ぶん撲なぐつて進じようか。」

「ばば茸たけ持つて、おお穢むさや。」

「それを食べたら、肥料桶こえおけが、早桶こえおけになって即死じゃぞの、ペツペツペツ。」

私は茫然ぼうぜんとした。

浪路は、と見ると、しやうぜん悄然と身をすぼめて首垂るる。うなだ

ああ、きみたち、おっかあ阿媽、しばらく！……

いかにも、ただいま唯今申さるる通り、くら較べては、玉と石で、まるで違う。が、似て非なるにせよ、毒にせよ。これをさえ手に狩るまでの、ここに連れだつ、この優しい女の心づかいを知ってるか。

——あれから菜畑を縫いながら、更に松山の松の中へ入ったが、山に山を重ね、砂に砂、窪地の谷を渡つても、余りきれいで……  
 たまたま落ちこぼれた松葉のほかには、散敷いた木の葉もなかつた。

この浪路が、気をつかい、心を尽した事は言うまでもなからう。  
 阿媽、これを知ってるか。

たちまち、口紅のこぼれたように、小さな紅茸べにたけを、私が見つけて、それさえ嬉しくって取ろうとするのを、遮って留めながら、浪路が松の根に気も萎なえた、袖褻そでつまについて坐った時、あせった頬は汗ばんで、その頸えりあし脚のみ、たださしのべて、討たるるよう  
に白かった。

阿媽、それを知ってるか。

薄色の桃色の、その一つの紅茸を、灯ともしびのごとく膝の前に据えながら、袖を合せて合掌して、「小松山さん、山の神さん、どうぞ茸きのこを頂戴な。下さいな。」と、やさしく、あどけない声して言った。

「小松山さん、山の神さん、

どうぞ、茸を頂戴な。

下さいな。——」

真の心は、そのままに唄である。

私もつり込まれて、低声こひこえで唄った。

「ああ、ありました。」

「おお、あつた。あつた。」

ふと見つけたのは、ただ一本、スツと生えた、侏いっすんぼし儒ぼしが洩しぶじ蛇じ、  
目傘やのめを半びらきにしたような、洒落しやれものの茸であつた。

「旦那さん、早く、あなた、ここへ、ここへ。」

「や、先刻見た、かつぱだね。かつぱ占地茸……」

「一つですから、一本占地茸とも言いますの。」

まず、枯松葉を箆に敷いて、根をソツと抜いて据えたのである。続いて、霜こしの黄茸を見つけた——その時の歓喜を思え。——真打だ。本望だ。

「山の神さんが下さいました。」

浪路はふたたび手を合した。

「嬉しく頂戴をいたします。」

私も山に一礼した。

さて一つ見つかると、あとは女郎花おみなえしの枝ながらに、根をつらねて黄色に敷く、泡のようなもの、針のさきほどのまじも交った。松の小枝を拾って掘った。尖さきはとがらないでも、砂地だからよく抜ける。



「松露よ、松露よ、——旦那さん。」

「素晴らしいぞ。」

むくりと砂を吹く、飯蛸いいたこの乾びた天窓あたまほどなのを搔くと、砂を被かぶつて、ふらふらと足のようなものがついて取れる。頭をたたいて、

「飯蛸より、これは、海月くらげに似ている、山の海月だね。」

「ほんになあ。」

じゃあま、あばあ、阿媽おつかあが、いま、（狐の宰丸がりま）ぞと詈ののしった

のはそれである。

が、待て——葷狩たけがり、松露取は闌たけなわの興きように入った。

浪路は、あちこち枝を潜くぐった。松を飛んだ、白鷺しらさぎの首か、脛はぎ

も見え、山鳥の翼の袖も舞った。小鳥のように声を立てた。

砂山の波が重り重つて、余りに二人のほかに人がない。——私  
はなぜかゾツとした。あの、翼、あの、帯が、ふとかかる時、色  
鳥とあやまられて、鉄砲で撃たれはしまいか。——今朝も潜水夫  
のごときしたたかな扮装して、宿を出た銃獵家を四五人も見  
たものを。

遠くに、黒い島の浮いたように、脱ぎすてた外套を、葉越に、  
枝越に透して見つけて、「浪路さん——姉さん——」と、昔の恋  
に、声がくもった。——姿を見失ったその人を、呼んで、やがて、  
莞爾した顔を見た時は、恋人にめぐり逢った、世にも嬉しさを  
知ったのである。

阿婆おば、これを知ってるか。

無理に外套に掛けさせて、私も憩った。

着崩れた二子織ふたこの胸は、血を包んで、羽二重なめらかよりも滑である。

湖の色は、あお空と、松山の翠みどりの中に朗ほがらかしに沁み通った。

もとのように、就なかんずくはるか中遥なかにに離れた汀みぎわについて行く船は、二艘そう、

前後に帆を掛けてすべ行ったが、その帆は、紫に見え、紅あかく見えて、

そして浪路の襟に映り、肌を染めた。渡鳥がチチと囀さえずった。

「あれ、小松山の神さんが。」

や、や、いかに阿媽おつかあたち、——この趣を知ってるか。——

「旦那、眉毛を濡らさんかねえ。」

「この狐。」

と一人が、浪路の帯を突きざまに行き抜けると、

「浜でも何人抜かれたやら。」一人がつづいて頤あごで掬すくつた。

「また出て、魅ぼかしくさるずらえ。」

「真まつ昼びる間まだけでも遠慮せいでや。」

「女めの狐の癖にして、辜丸がりまをつかませたは可笑おかしなや、あはははは

。」

「そこが化けたのや。」

「おお、可恐こわやの。」

「やあ、旦那、松露など、黄茸など、ほんものを売ってやろかね

。」

「たかいおあし銭で買わつせえ。」

行過ぎたのが、菜畑越もつに、纏いっときれるように、一いっとき斉きに顔を重ねて振返つた。三面六臂ろつぴの夜叉やしやに似て、中にはおはぐろの口を張つたのがある。手足を振つて、真まつくろ黒くろに喚わめいて行く。

消入りそうなを、背を抱いて引留めないばかりに、ひしと寄つた。我が肩するる婦おんなの髪かみに、櫛くしもささない前髪まへかみに、上手がさして飾つたように、松葉が一葉、青々としかも婀娜あだに斜はすにささつて、（前まへこぞう）とか言う簪かんざしの風情そのままなのを、不思議に見た。茸たけを狩るうち、松山の松がこぼれて、奇蹟のごとく、おのずから挿さつたのである。

「ああ、嬉しい事がある。姉さん、茸が違つても何でも構わない。

今日中のいいものが手に入ったよ——顔をお見せ。」

袖でかくすを、

「いや、前髪をよくお見せ。——ちよつと手を触つて、当てて御覧、大したものだ。」

「ええ。」

ソツと抜くと、掌たなそこに軽くのる。私の名に、もし松があらば、げにそのままの刺いれずみ青である。

「素晴らしい簪かんざしじゃあないか。前髪にささつて、その、容子ようすのいい事と言つたら。」

涙が、その松葉に玉を添えて、

「旦那さん——堪忍して……あの道々、あなたがお幼ちいさい時のお話

もうかがいます。——真のあなたのお頼みですのに、どうぞして  
と思つても、一つだつて見つかりません……嘘と知つていて、そ  
んな茸をあげました。余り欲しゆうございましたので、私にも、  
私にかつてほんとうの茸に見えたんですもの。……お恥かしい身か  
体からだですが、お言ことばのまま、あの、お宿までもお供して……もしその  
茸をめしあがるんなら、きつとお毒味を先へして、血を吐くつも  
りでございました。生命いのちがけでだましました。……堪忍して下さい  
まし。」

「何を言うんだ、飛んでもない。——さ、ちよつと、自分の手で  
その松葉をさして御覧。……それは容子が何とも言えない、よく  
似合う。よ。頼むから。」

と、かさに掛かかつて、勢いきおいよくは言いながら、胸が迫つて声が途切れた。

「後生だから。」

「はい、……あの、こうでございますか。」

「上手だ。自分でも髪を結えるね。ああ、よく似合う。さあ、見て御覧。何だ、袖に映したつて、映るものかね。ここは引ひき汐しおか、水が動く。——こつちが可いい。あの松影の澄んだ処が。」

「ああ、御免なさい。堪忍して……映すと狐になりますから。」

「私が請合う、大丈夫だ。」

「まあ。」

「ね、そのままの細い翡翠ひすいじゃあないか。琅玕ろうかんの珠たまだよ。——



小松山の神さんか、竜神が、姉さんへのたまものなんだよ。」

ここにも飛交ういなごみどりの翠に。——

「いや、松葉が光る、白金プラチナに相違ない。」

「ええ。旦那さんのお情なさけは、翡翠です、白金です……でも、私はだんだんに、……あれ、口が裂けて。」

「ええ。」

「目が釣上つて……」

「馬鹿な事を。——きのこ蕈で嘘を吐いたのが狐なら、松葉でだました

私は狸だ。——狸だ。……」

と言つて、真白まっしろな手を取つた。

湖つづきあしなか蘆中しずかの静な川を、ぬしのない小船が流れた。

大正十三（一九二四）年一月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 小春の狐

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>